特集　チャレンジ

上／日本百景「岩鼻」と「上田　道と川の駅　おとぎの里」。今回、建物東側に自動販売機が設置される　下左／「ゴミ拾い」など地域住民と一緒に活動している　下右／地ビール醸造所「天神ブルワリー」のスタッフの皆さん

地域力向上目指す「おとぎの里」共感による地域づくりで活動28年

上田 道と川の駅 おとぎの里（上田市）

間藤まりの・文

上田市の奇岩「岩鼻」の麓にあって、千曲川のほとりに位置する「上田　道と川の駅・おとぎの里」。「自らの手で持続可能な地域を守りたい」「豊かな暮らしを未来に残したい」と、思いを持った有志が集まり、子どもたちと川遊びやごみ拾いを始めたのは1994年のこと。任意団体が主体となり、行政、大学、企業など地域の各機関と連携しながら、自走するまちづくりを続けている。団体理念は「持続可能な豊かな地域の創造」。最近は上田市初となる地ビールの醸造や、子育てや有事のときに支援につながる自動販売機の設置など、新しいチャレンジを続ける「おとぎの里」代表世話人の石井孝二さんに話を聞いた。

自助と共助の意識を再び

「おとぎの里」が大切にしているのは、かつての日本を支えていた「おらが村のことだから…」という意識。例えば、岩鼻の上にある天然の展望台「千曲公園」の整備。春はぼんぼりに照らされた夜桜が美しく、見上げたことのある人も多いのではないだろうか。このぼんぼりの設置や管理、公園までの遊歩道の整備など、市町村や自治会だけでは手が回らない部分を担うのがおとぎの里だ。2019年の台風19号災害では、避難所に850食分のカレーやうどんを提供。さまざまなシーンで、公助だけに頼らない、自助と共助に取り組んでいる。

市民と住民の違い、目指す姿とは

自助と共助について、「われわれは住民ではなく、公と共に公益事業を展開できる市民でありたい」と、話す石井さん。「市民」の語源は、福沢諭吉が近代西欧の「citizen」を日本語に翻訳した際、自立した個人から成る「市民」社会を目指して「市民（いちみん）」という言葉を使ったと言われている。一方で「住民」とは、一般的にある範囲を定めた区域に住む人のこと。行政の区割りという観点で見れば、行政サービスを受ける人、と言い換えることもできる。「どちらが良い悪いという話ではありません。ただ、共に公益事業を展開するという意識は、まちづくりの場で必要なものだと考え実践しています」（石井さん）。

目的を共有し自立できる力を持つ

こうした考えの下、市民の立場で多様な連携を実現してきたおとぎの里。長野県内では初めて国土交通省が定める河川協力団体と道路協力団体の認可を受けている。その活動の全ては団体理念の実現に向けたもの。「保全や防災、施設運営など活動はさまざまですが、利害の一致だけではないビジョンの共有、お金だけではない利益の還元が私たちの核です」と、石井さん。公益事業と収益事業を同時に展開しているのも特徴で、設立以来、地域の取り組みのために財源を確保する、コミュニティービジネスの形を推進している。

活動の公益性が認められ国道沿いに自動販売機を設置

関東地方整備局内で初となる今回の挑戦は、国有地で、公益性の認められた民間団体が自動販売機を設置・運用する特別な事例だ。販売機の一つは、ダイドードリンコ株式会社からの提供。また、自販機コーナーの設置には、上田市の株式会社協和食品も協力している。販売は単にドリンクだけでなく、オムツやおしり拭きなどの子育て支援グッズ、非常用食品やドッグフードなどバリエーションも豊富。停電時の稼働やキャッシュレスに対応している。

「収益は、これまでのように地域活動の財源にします。次世代の育成にも力を注ぎながら、休むことなく挑戦を続けていきたいと思います」（石井さん）。たくさんの思いが詰まった自動販売機は、昨日4月28日から一部運用が始まった。